

文法・語法の理解を「正しく伝える」ために 『ジーニアス総合英語』を活用する

山岡憲史



新学習指導要領と4技能入試

2018年3月に、高等学校の新学習指導要領が告示され、2022年から年次進行で実施されることになった。今回の改定では、現行のものよりさらに発信力に重点を置き、「話すこと」「書くこと」と「発表」の2つの領域に分けている。「書くこと」においても、それぞれの科目の目標の中で、「使用する語句や文、事前の準備などにおいて」「基本的な語句や文を用いて、情報や考え、気持ちなどを論理性に注意して文章を書いて伝えることができるようにする」のような、かなり踏み込んだ書き方が見られる。

英語教育が大きく変わろうとしているもう一つの原動力は、2020年導入予定の「英語4技能検定」である。民間の試験を活用し、英語の「話す」「書く」能力も入試の合否を左右することになる。

文法をどう扱うか？

指導の重点や制度がどのように変わっても、英語の発信力を養成するための文法力の重要性が薄らぐことはない。新学習指導要領における文法の扱いは現行のものを踏襲し、「コミュニケーションを支えるもの」「用語や用法の区別などが指導の中心となったりしないよう配慮し、使用する場面や伝えようとする内容と関連付けて整理するなど、実際のコミュニケーションにおいて活用できるように、効果的な指導を工夫すること」を求めているが、単に規則を学ばせ演習をするだけの指導から、文法の機能や使用場面を十分に意識し、英語でコミュニケーションをする際に活用できる

力を養う指導が今以上に大切になってくるだろう。

その一方で、各科目を指導する際に、どのように文法指導を位置づけ、生徒に学習をさせるかがますます大きな課題となる。教科書の語数が増え、言語活動も高度なものが要求されるなかで、文法指導に特化した時間を持つのは極めて難しい。そこで提案したいのは、実際に表現をさせ、その都度、総合英語の参考書の該当箇所を参照して読ませることである。『ジーニアス総合英語』（以下、『G総合』）の解説は簡潔・明瞭であり、実際に使う観点で書かれているので、生徒にとってコミュニケーションの基礎力をつける有益な情報を得られることであろう。

コミュニケーション志向の『G総合』

総合英語の参考書の役割は、文法の形式(form)とその意味(meaning)を丁寧に解説することにある。また、それぞれの形式がどうしてそのような意味を表すのかについての理解を促す工夫、用法(usage)についての説明、例外や補足的な事項の追記などを規範的に施すのが常である。『G総合』の大きな特徴は、これらに加え、コミュニケーションに有用な『ジーニアス英和辞典』の持つ語法解説への徹底的な配慮にある。

(1) 間違いやすい用法についての解説

例) Don't と Never は、単に命令の強さが異なるのではなく、Don't が1回だけのことを命令するのに対し、Never は繰り返ししないように命令する。従って1回きりのことにNeverを使わない。(p.41)

(2) 形による意味の違いの解説

例) (助動詞) can は「一般的な可能性」(出来事が不定期に何回か起こる可能性)を表すのに対して, may は「具体的な可能性(出来事が特定の1回だけ起こる可能性)」を表す。(p. 121)

(3) 文法の持つ機能に焦点を当てた解説

例) (関係代名詞の) 制限用法は複数の同類のものの中からどれなのかを「絞り込む」用法, 非制限用法は先行詞に情報を「付け足す」用法と考えればよい。したがって, 固有名詞など1人[1つ]しかないものは, 制限用法の先行詞にはなれないが, 非制限用法では可能となる。(p. 310)

(4) 形式が表す感情や意図についての解説

例) How come ...? How does it come about that ...? (どうして...のようなことが起こるのか。)に由来する。理由を尋ねる表現である。Why...? より意味が強く, 時には感情的な表現になるため, 目上の人に使うのは避けたほうがよい。(p. 561)

『G総合』を発信力強化に生かす

文法を使えるようにするためには, その形式が使われる適切な場面(situation)を設けることが必要である。学習指導要領の「使用場面の例」などを参考に状況を設定し, 『G総合』を参考に, 英語の表現を考えさせてみる。

場面1) 水を1杯持ってきてほしいと依頼する場合, 表現によってどのような違いがあるかを考えさせる。

- ① Can you bring me a glass of water?
- ② Can you bring a glass of water to me? (p. 60)

場面2) 食卓で家族に塩を取ってほしいと頼む。

- ① Will you pass me the salt?
- ② Would you pass me the salt? (p. 230)

場面3) 事故で骨折したことを伝える。

I got his leg broken in a tackle. (p. 237)

場面4) 窓を開けようとしている人の行為に対して苦言を述べる。

I'd rather you didn't open the window. (p. 349)

表現力をつけるには, 実際に話したり書いたりした際の間違いや不適切さについて, 自分で調べて気づかせることである。

例1) Can you speak Japanese? (p. 116) / Who are you? は適切な英語か? (p. 544)

例2) I would appreciate very much if you would reply as soon as possible. の間違いは? (p. 394)

例3) I'll be surprised unless he comes. の間違いは? (p. 486)

例4) According to my opinion, you should stay here. は可能か? (p. 525)

2文を比べて考えさせることもできる。

例1) I wonder if I can park here. と I'm wondering if I can park here. (p. 87)

例2) The book was sold quickly. と The book sold quickly. (p. 162)

例3) I demand that John apologize. と I demand that John should apologize. (p. 350)

例4) I did it by myself. と I did it for myself. (p. 393)

『G総合』は, 意図や感情を正しく伝達するためにいかに規則を活用するかを追求する参考書である。「文法, 言語の働きなどの理解を深めるとともに, これらの知識を, 聞くこと, 読むこと, 話すこと, 書くことによる実際のコミュニケーションにおいて, 目的や場面, 状況などに応じて適切に活用できる技能を身に付けるようにする」という学習指導要領の第1の目標を高等学校の初期の段階から意識し, 英語の豊かな表現様式に触れさせて, コミュニケーションへの意欲を高めるために, 「読んで味わう」参考書として, 有意義な活用を期待したい。総合英語の参考書を一から黙々と読ませる指導ではなく, 折に触れて読ませて学ばせるには, 教師が「どこを見ればどのような情報が得られるか」について熟知している必要がある。そのためにも, 教師自身がまず「読んで味わって」ほしいものである。

(やまおか けんじ・立命館大学教授)